

○2024 年度受賞者

【経済分野での活躍等】

◆郷農彬子氏（新 17 英）株式会社バイリンガル・グループ代表取締役社長

在学中、東京パラリンピックで通訳ボランティア、国際会議の事務局に勤務。後に国家公務員として、文部省・日本ユネスコ国内委員会に所属し、事務局員として国際会議を組織し進行する経験を積む。同年代の経済的自立の危うさを感じ、40 歳で、国際会議の準備・運営を専門とする会社を起業。社長として多数の社員と共に、グローバル・コミュニケーションと文化交流を追求し続け、高い売り上げ実績を上げ事業運営を成功させてきた。日本の国際会議業界の草分け的な存在。実践した国際会議は政府系の多国間会議、学会、民間企業や民間団体の会議など約 3500 件、分野も多岐にわたる。日本 PCO 協会、東京商工会議所、日本ユネスコ協会連盟をはじめ、日本女子大学等の評議員、理事及び大学非常勤講師等を通じ業界や社会に貢献。

◆木村弘子氏（新 18 児）毛管浄化システム株式会社代表取締役

卒業後、幼稚園勤務を経て、父の開発した土壌浄化法という污水处理技術を下水道事業等に利用できるよう、建築コンサルタント会社を 1980 年設立、代表取締役を務め現在に至る。起業時の活動資金が必要な折には、クラスメートからの資金援助などを得て継続することができた。土壌浄化法は悪臭のする汚水槽に土壌で被覆して簡単に二次公害を防止することのできる技術で、様々な圧力に屈することなく、困っている水問題を解決したいという基本理念を貫く。経済活動をするためには継続が大切であり、現在では家族全員で会社の運営を行っている。なお、この技術は JICA の「普及・実証事業」が採択され、ボタンに土壌浄化法のモデル施設が設置された。「日本女子大物語櫻楓の百人」の新聞記事が桜楓会百周年の記念誌に掲載。

◆仲二見裕美氏（新 40 理 I 化）旭化成株式会社品質保証部

卒業後、技術職でスタート。入社 2 年目で研究成果を学会発表、当時は画期的だった。エストラマー、合成ゴム領域での数々の製品を開発し、技術営業として販促を実施。国内では技術開発部、工場の品質管理、本社事業部での企画、web サイトの立ち上げ、品質保証を経験。海外で、シンガポールでの工場立ち上げに参画(2012-2013 年)。同社初の海外の R&D（リサーチ&ディベロップメント）センターをドイツに設立し、初代センター長に就任(2017-2021 年)。社内外で DE&I（ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン）推進活動も社内外で実施。女性が社会で活躍する手助けをしたいと考えている。技術関係では社内表彰だけでなく、2013 年化学工学会女性賞、2016 年関東地方発明賞を受賞。

◆根本和子氏（新 42 食管）大日本印刷株式会社ダイバーシティ&インクルージョン推進室室長

卒業後、同社入社。包装事業部に配属後、食品、医薬品、菓子、日用品など幅広い業界を担当し、得意先のパッケージを、使う人の利便性や手にとりたくなるデザイン、販促プロモーションなどの提案を営業として手掛ける。育児休業を経て、事業部初の女性営業課長、営

業部長に昇進。後進のロールモデルとして、事業部内の女性ネットワーク活動を行う。2019年、本社部門ダイバーシティ&インクルージョン推進室の室長に就任し様々な活動を実施、経済産業省の「なでしこ銘柄」「共働き・共育て企業」に選定の他、「PRIDE 指標」3年連続GOLD受賞。「D&I アワード」ベストプレースの受賞、NPO 法人 J-Win のダイバーシティ・アワード「アドバンス部門」の大賞受賞などの外部評価を得ている。

◆藤巻奈津子氏（新 54 現）グローバル親子クラブ代表

高校時代からジェンダーと労働社会学に興味を持ち、日本女子大学の建学精神に共感し入学。卒業後、日立製作所での勤務を経て、London School of Economics で Gender and Social Policy の分野で修士号を取得。帰国後は外資系人事コンサルティング会社で、日本企業における国際競争力やダイバーシティ促進のため、人事制度設計に携わる。2016 年、女性のキャリアと子育て両立支援、子どもたちのグローバル・英語教育支援をミッションとして、品川区にて「グローバル親子クラブ」を設立。共働き世帯の子供向けの英語が学べる学童保育、ネイティブ講師によるレッスンの提供、多文化理解学習等を実施。地域貢献として 2017 年より同区内の図書館で、幼児・小学生向けに英語お話会も開催。現在、一橋大学 Global Education Program の非常勤講師。

【社会貢献】

◆樽井 彰子氏（新 18 社） 特定非営利活動法人かまくら在宅生活相談センター 理事長／地域密着型通所介護デイ・西かま施設長／特定非営利活動法人かまくら地域介護支援機構 理事

在学中、一番ケ瀬康子先生のもとで社会福祉を学ぶ。夫が経営していた会社で働き始めたことが社会参加へのきっかけとなった。社会福祉への志深く、まず介護保険制度発足前年の 1999 年、制度が円滑に運用されるようにと「かまくら地域介護支援機構」を立ち上げた。2001 年、NPO を設立、自宅を改修して小規模のデイサービス「デイ西かま」をオープン。施設内にケアマネジャーのいる居宅介護支援事業所を併設。着実な地域密着により活動が進展。かまくら在宅生活相談センターを設立、現在に至る。行政や市民を巻き込んで、活動の継続も期待できる。大学での「地域マーケティング論」として紹介される。

◆今川 英子氏（新 23 国、大院 13 日文）北九州市立文学館 館長

2006 年開館の「北九州市立文学館」設立準備に携わり、2012 年より 2 代目館長として現在に至る。氏は近代文学研究者として、この地域文化の継承と発展に長年その知見を活かしてきた。その社会的文化的環境づくりは氏の館長としての広い視野と人に対する深い洞察に基づき、生きるために大切なものは何かを考えさせられる。単なる文学館に終わらせず、「北九州ゆかりの作家の展覧会」開催、「林芙美子文学賞」を創設して、新人を発掘。「子どもノンフィクション文学賞」では全国から 400 編余りの応募があり、地域への広がりを見せている。コロナ禍にあっても、芸術こそ、文学こそ、人間の本質を支え育むものであるという氏の立ち位置は変わらず、2022 年度は北九州市出身の写真家藤原新也氏の展覧会及び講

演会を市立美術館合同で開催した。

◆渡邊 美佐緒氏（新 23 社）社会福祉法人ビーハッピー 施設長

社会福祉学科を卒業後 51 年間現在に至るまで障害者福祉の現場で働く。卒業直後は知的障害者の入所施設で 15 年間働いたのち、平成元年からは夫と共に自宅の半分を開放し「みのりの家」という事業を始める。年々賛同者を増やし、2007 年には社会福祉法人ビーハッピーとなり、60 人のスタッフと共にデイサービス・ショートステイ・グループホーム・相談支援事業・居宅介護事業と多くの事業を行っている。その基盤となっている理念は、女子大社会福祉の人間個々人への人間愛と、社会科学や人間科学・自然科学に裏打ちされた理論に基づく実践という考え方である。特に新規事業のパイオニアやオピニオン・リーダーとして多々創意工夫を重ねて時代に要請される障害者福祉事業をコミュニティー密着型で多々展開・開拓している。

◆道添 元美氏（新 52 食）かながわ経済新聞合同会社 専務執行役

日本企業の 9 割を占める中小企業の光る技術や製品、サービスが日の目を浴びることが少なかったのが 11 年前。それならば我々が、中小企業の広報役を担おうとの思いで、中小企業やベンチャー企業に特化した地域経済新聞「かながわ経済新聞」を、2013 年に代表と共に立ち上げる。現在は紙以外のウェブ展開もしている。中小企業の実情や思いを伝えるため、2023 年より神奈川県中小企業・小規模企業活性化推進審議会としても活動。中小企業の振興に関する重要事項について、知事の諮問に応じて調査審議、意見の建議などを行っている。日々中小企業を取材する中で、結婚や出産など様々な事情でキャリアの中断や停滞を経験しても自分の手で活躍の場を切り拓いている女性が多くいることを知り、総合経済誌「ニューリーダー」で情報発信もしている。

◆特定非営利活動法人ホープフル・タッチ（代表：高田みほ氏）（新 60 心、大院 52 心前）

シリア内戦開始後のトルコで出会い、ビジョンを共有したシリア人 2 名と高田氏による小さなボランティア活動をきっかけに 2016 年に特定非営利活動法人「ホープフル・タッチ」設立。翌年、法人化。団体設立前、シリアからの避難民への緊急人道支援を実施する NGO に勤務し、国境県にて大規模な食糧支援に従事。この緊急支援事業を通じ出会った多くのシリア人家族や子どもから、「学校に行きたくても行かれない」という声を聞き、この状況に対し、様々な支援から取り残された子どもたちへ、学ぶ機会を提供する。小規模ながらも自分たちができる範囲で独自の活動を開始し、シリア難民の子どもたちとの活動を通して、世界中で国際社会から忘れられた弱い立場にある子どもたちを見守る必要性を認識し、カンボジアやスーダン、シリア国内でも活動を実施。

※受賞時の組織名、役職名で記載。